弟（おとうと）の王権

――『彦火々出見尊絵巻（ひこほほでみのみことえまき）』制作背景論おぼえがき――

永井　久美子

一．はじめに

――後白河院の絵巻としての『彦火々出見尊絵巻』

兄の釣り針を借りて海に行った弟が、その針を無くして兄に責められ、針を探して龍王の宮へと向かう――このいわゆる「海幸山幸」の物語は、青木繁の絵画『わだつみのいろこの宮』などでも知られ、かなり有名な日本神話の一つと言えよう。『彦火々出見尊絵巻』は、この神話を絵巻化した作品であり、その制作年代を十二世紀にまで遡ることができる、現存する絵巻物では、比較的初期のものの一つである。

しかし、この絵巻の原本は失われてしまい、現存するのは江戸時代に制作された模本のみであるため、『伴大納言絵詞』や『信貴山縁起絵巻』といった他の十二世紀の絵巻と較べ、研究は非常に少ない。そのような中、源豊宗氏が『彦火々出見尊絵巻』原本の制作年代を後白河法皇の時代であると推定し、絵は常盤源二光長、詞書は藤原教長によるものとして位置付け、この絵巻を紹介したことは、大きな業績であった[1]。

源氏が『彦火々出見尊絵巻』を後白河院時代の作品と特定できたのは、この絵巻が『伴大納言絵詞』『吉備大臣入唐絵詞』とともに伝来したことがはっきりしており、これら十二世紀の作品と比較することが可能であったためである。『彦火々出見尊絵巻』は、後崇光院の日記『看聞日記』により、嘉吉元年（一四四一）四月二十六日に、後崇光院と後花園天皇が観賞したことが知られ、その際、若狭国松永庄新八幡の神庫から運上されたことが分かっているのである[2]。

このように、伝来が『看聞日記』から分かるということは非常に重要な情報であるが、『彦火々出見尊絵巻』が若狭に伝来したのは後白河院亡き後のことなのであって、この絵巻の制作背景として論ずべき問題は、後白河院のもとで、なぜこの神話が絵巻化されたのか、であるはずである[3]。

従って本論文では、『彦火々出見尊絵巻』の物語の原型が語られている『日本書紀』と、『彦火々出見尊絵巻』とを比較し、どのような神話の変容が絵巻に見られるのかを改めて確認し、その制作の背景にある、後白河院と彼の周辺にいた絵師及び能書家たちが形成していた「文化サロン」が、どのように神話を再構成したのかについて論じたい。この「原テクスト」と絵巻の詞書の比較を通して初めて、『彦火々出見尊絵巻』が後白河院の所有した絵巻としてどのような意味を持っていたのかがたち現れ、数々の絵巻を生み出した後白河院のサロンが作品に込めた意図を考えることができるであろう。

二、読み替えられる神話――『日本書紀』との比較から

絵巻の内容を論じる前に、これから扱う『彦火々出見尊絵巻』の模本について少々紹介しておこう。『彦火々出見尊絵巻』は、現在六巻に仕立てられており、江戸時代に、原本が小浜城主酒井忠勝によって徳川家光に献上された際、御用絵師狩野種泰が模写して明通寺に残されていたものが原本の亡失後も伝来し、現在「明通寺本」と称される模本となった。[4]『彦火々出見尊絵巻』には五種類の模本が存在しているが、本論文では、最も古い模本である明通寺本を研究対象とする。

明通寺本『彦火々出見尊絵巻』は、模本の中では古いものとはいえ、江戸時代前期の模写であるため、原本の描線や色彩について論じることはできず、まさにそれ故に、長年この絵巻は注目されてこなかったのである。しかしながら近年、源氏・小松氏の論考に続いて、『彦火々出見尊絵巻』を十二世紀の風俗を描いた絵画史料として研究する保立道久氏の研究が発表され、[5]原本の制作年代や作者の推定にとどまらない研究がようやく始められている。

そこで『彦火々出見尊絵巻』の内容であるが、この絵巻に描かれているのは、冒頭に述べた通り、弟が兄を服従させ王権をひらくという神話である。『日本書紀』では、弟の彦火々出見尊が龍王にもらった潮満(しおみち)の玉と潮干(しおひ)の玉の呪力を借りて兄を屈服させ、兄の尊は以後、弟の「奴(つかね)」になることを誓い、これが隼人の祖となったことが語られている。[6]絵巻でも、基本的な話の流れは『日本書紀』と変わらないのだが、保立氏が指摘した通り、『彦火々出見尊絵巻』に描かれた兄弟の従属関係には、絵巻の制作された院政期の荘園支配体制と服属の「礼」が取り込まれている。『彦火々出見尊絵巻』において、隼人の祖となった兄の尊は荘園領主の姿をとって表されており、その領地として描かれているのは、中世的な御厨(みくりや)（漁業荘園）なのである。また保立氏は、兄が弟に服従する際に見せる、手を擦り門まで出て弟を見送るしぐさも、中世的な礼を踏まえたものであると指摘するなど、絵巻の中に見られる中世の風俗に着目した絵画史料論として、『彦火々出見尊絵巻』研究の

新たな地平を開いてくれている。

では、兄の服従の仕方が多分に院政期であり、神話に絵巻が制作された時点での設定が取り込まれていることは、当世的な場面設定を取り込みつつ、十二世紀において神話がどのように読み替えられていたのかを意味するのだろうか。設定された世界の読解を行った保立氏の論から一歩前に出て、「一荘園領主として弟帝に服属する兄の姿」が、後白河院政期においてどのような意味をもちえたのかという、物語の構造そのものの転換点について考察する必要があるだろう。

では、『日本書紀』における王権と服属の物語は、十二世紀においてどのように受容されたのか。そこで研究の先鞭となった源氏の研究に立ち戻ると、氏は既に、『日本書紀』の神話と『彦火々出見尊絵巻』とを比較しており、絵巻は弟の尊が兄を屈服させる立身譚と、尊と龍王の娘・豊玉姫との婚姻譚に物語の重点をおいていると指摘している。この点から源氏は、この絵巻が、室町時代以降の御伽草子に通じる「童話性」をもっていることを主張し、この「童話性」は、この絵巻が「ロマンティックな夢をもつことのできた少年少女」のために作られたことに由来すると推定している(7)。

源氏はさらに、この絵巻が物語叙述の手法において、何度も同じような構図が使われたり、画中詞が書き込まれたりする(図1)などの「稚拙さ」を呈していると論じてもいる。源氏は画中詞の存在を「子女に聞かせる童話としての、表現の懇切性(8)」によるものとし、子ども向けの作品であったことのもう一つの論拠としているのだが、繰り返しの構図が本当に稚拙なのか、また果たして画中詞がイコール子どものための解説と言えるか否かは、再考を要するだろう。

この源氏の論は鋭くこの絵巻の特徴を掴んではいるが、『彦火々出見尊絵巻』が子ども向けに作られた作品であったかという問題は、絵巻の物語叙述の方法が仮に稚拙であったとしても、物語の内容からいって実はもう少し考察する余地があるのではないかと考えられる。

『彦火々出見尊絵巻』では、源氏が指摘した通り、弟の尊が兄を服属させたことと、尊が龍王の一族と婚姻関係を結び、海神のもつ呪力を手中にしたということに物語の重点が置かれ、この二点については特に詳しく語られている。しかし、氏が

図1　巻五　潮満玉を振る彦火々出見尊と降参する兄
画中詞「かうこうところ」(降乞うところ)

「童話性」として説明したまさにこれら二点の出来事を通して、弟の彦火々出見尊は王者になりえたのである。即ち、兄との関係と、龍王の一族との関係とによって成り立った、いわば「弟の王権」の成立物語であるわけで、このような王権に関わる内容の神話を、王権が存続の危機にあった院政期において、後白河院のもとで、王権を意識せずに絵巻が制作されたとは考えにくい。

また、後白河院が王権の成立神話を意識して絵巻を制作させたかどうか考えたとき、『彦火々出見尊絵巻』と『日本書紀』における神話とを比較して、物語の終り方に差異があることは、注目すべき点である。絵巻は、弟に服従した兄の尊が、帝となった弟に贄を献上する場面で幕を閉じているのだが、『日本書紀』に、このくだりは存在していない。兄が弟の「奴」となることを誓う場面は『日本書紀』にも存在するが、『日本書紀』での結末は、豊玉姫が海に帰っていくというものである。この結末部の変更から考えられることは、兄の尊の一族が「奴」となって、帝となった弟の支配下に以後あり続けたことを絵巻が強調したのではなかったかということである。

図2　巻六　豊玉姫の出産場面

では、豊玉姫が海に帰るという物語は絵巻ではどう扱われているのかというと、絵巻では、兄の尊が贄を献上する場面の前に、豊玉姫の出産の場面が描かれているのだが、ここで産屋の中の豊玉姫が鰐の姿をしていないことに注目したい（図2）。『日本書紀』では、彦火々出見尊の子を孕んだ豊玉姫が、出産の際、本来の姿である鰐に戻るため、覗かないでほしいと尊に言ったにも拘わらず、鰐の姿を尊に見られ、そのため龍王宮に帰っていくということになっている[9]。しかし絵巻では、姫は人間の姿のままであるため、龍王宮に帰らねばならない必然性を失っており、それ故に、姫が海を渡っていく姿は描かれていない。

これは、「ロマンティックな」物語に仕立てられた彦火々出見尊神話に、鰐が登場することが相応しくないためでも、王の祖先が鰐であることを秘諾しようとしたためでもなく[10]、姫が海に帰る場面を描かないことで、王権と龍王の一族との関係の断絶を語らず、王権に龍王の力が備わっていることを強調したものとしては考えられないだろうか。

以上のことから、『彦火々出見尊絵巻』では、『日本書紀』の神話が巧妙に読み替えられており、その読み替えのかたちは、「ロマンティックな夢をもつことのできた少年少女」のために「恋愛中心の」物語にすることではなく、兄を従えた王権の誕生物語を、より強調することに特徴があったと言うことができる。

三「する事も無」き弟宮——後白河院と彦火々出見尊

では、『彦火々出見尊絵巻』が「ロマンティックな童話」ではなく、「弟尊の王権」の成立神話として制作されたとすると、この王権の物語は、後白河院のもとでどのような意味を持ち得たのであろうか。そこで考えたいのは、後白河院本人にとって、兄弟と龍王の一族が、王権とどのような関係をもつものとして存在していたかである。

後白河院の兄弟関係としてまず考えられるのは、何と言っても、その兄・崇徳院との関係である。崇徳院は、後の後白河院・雅仁親王と同じく鳥羽天皇の皇子であったが、父との不和などが原因で、若くして退位させられた経緯をもっている。その後即位したのは、末弟の近衛天皇であったが、近衛天皇が夭折し、その次の皇位継承者を崇徳院の皇子にするか、雅仁親王の皇子にするかで争いがおき、それが保元の乱に発展したことは、余りにも有名である。

保元の乱では、結果として崇徳院側が敗北し、崇徳院は讃岐に流されたわけだが、皇位を継承した後白河院に対する崇徳院の怨恨は、崇徳院が亡くなる直前には「御グシモ剃ズ、御爪モ切セ給ハデ、生ナガラ天狗ノ御姿ニ成」[11]るまでにエスカレートし、死後も怨霊となって後白河院を苦しめ続けたという。から、非常に強いものであったことが分かる。この崇徳院の強烈な怨霊に対する恐怖のもとで『彦火々出見尊絵巻』が制作されたとすれば、弟が兄を服従させて帝となるこの神話は、弟の後白河院が掌握した王権の正当性を語る一手段として機能するよう工夫された成果と考えられはしないだろうか。

「海幸山幸」の神話に崇徳・後白河の兄弟が重ね合わされたか否かは、これだけでは推測の域を脱し得ないが、『彦火々出見尊絵巻』には、兄の服従を強調する結末部の他に、兄弟の関係において、もう一つ着目したい点がある。それは、物語の始まりとして重要な海幸と山幸の交換の場面が、

兄の尊は、釣をして世の中を過ぐし、弟の宮は、する事もなくてなむ過ぐしける。然れば、いと不合にて、兄の釣る針を暫し借るに…[12]

と語られている点である。ここで、彦火々出見尊は「する事も無」き「不合」な弟宮として登場しており、弟が何かを釣

り針と交換したという記述は無く、兄といかなる幸とも交換していないのである。即ち、絵巻において、弟宮は山幸に恵まれた存在としては描かれておらず、『彦火々出見尊絵巻』において、彦火々出見尊は「山幸」ではないのである。

では、兄を服従させた弟が、「する事も無」き「不合」な弟宮であったということは、後白河院の王権とどのように関わっているのだろうか。ここで考えたいのは、後白河院が、流行歌謡であった今様に没頭し、遊芸に明け暮れていた第四皇子であったということである。後白河院がいかに遊芸ぐるいの人物であったかは、歌謡集『梁塵秘抄』を後世に残したこと、そしてその『梁塵秘抄』が、現存するのは歌詞集巻第一断簡及び第二、口伝集巻第一冒頭部及び第十のみとはいえ、当初は全二十巻あったという大部の作品であったことからだけでも窺い知ることができる。

しかし、皇位から程遠いはずの存在であったこの第四皇子は、さまざまな偶然が重なって二十八歳にして即位し、退位後も絶大な権力を掌握し続けた。そして崇徳院の怨恨は、弟に王権を奪われたことだけに由来するのではなく、それが帝王の器ではない、特に遊芸ぐるいの弟であったがためにエスカレートしてしまったのである。そのことは、『保元物語』における崇徳院の言葉に、「文にも非ず、武にもあらぬ四宮に、位を越えられ、父子共に愁にしづむ」(13) とあることからも分かり、無類の今様ぐるいとして知られた第四皇子は、特に兄に匹敵する何かをもっていたからということなく即位してしまったのである。そして崇徳院は、後白河院の王権に、血筋の面から納得できなかっただけでなく、王者としての素質の点からも納得できなかったのである。

だとすれば後白河院は、崇徳院の強力な怨念の前に、正当な皇位継承者は、崇徳院でも崇徳院の皇子・重仁親王でもなく、他ならぬ自分であると主張しなければならなかったと考えられ、自分の王権こそ正当であることのよすがを必要としたとき、そこにたちあがってきたのが、彦火々出見尊の神話であったのだろう。しかも、『日本書紀』に語られた「弟の王権」の神話を、自分の必要とするかたちに読み替えて享受し、兄の服従を強く説く絵巻にすることで、この神話を「自己の王権の物語」としたと考えられる。

そこで次に、絵巻のもう一つの大きな強調点である、彦火々出見尊と龍王宮との関係は、後白河院にとってどのような意味をもちえたのかを考えねばなるまい。この問題は、彦火々出見尊が掌握し、その後持ち続けた龍王の力が、院政期においてどのような意味をもっていたのかというテーマに結びつく。

院政期において、龍王の力と王権が関わってくるのは、龍王が持っていると信じられていた如意宝珠が、この世を支配

する王権のシンボルとして機能し始めたことと、その如意宝珠が収められているとされていた龍王の宝蔵をこの世に再現することが、権力の表明手段となりえたという問題において[14]である。院政期には、摂関家の宇治の宝蔵や、鳥羽上皇の勝光明院宝蔵など、複数の宝蔵が有力者によってつくられ、他ならぬ後白河院も、自らの御願寺である蓮華王院に宝蔵を設け、絵巻その他の宝物を秘蔵していた。龍王の宝蔵を模した宝蔵がいくつかある中で、とりわけ蓮華王院宝蔵の所有者である後白河院が、龍王から呪力を与えられた彦火々出見尊と重ね合わせられることで、龍王の力を有してこの世を支配するのは後白河院であると主張したと考えられるのである。絵巻に描かれた潮満玉・潮干玉を仏典における如意宝珠と安易に結びつけて論じることは避けるが、如意宝珠をもつ権利をもっていることの証明として絵巻が読まれたのではないかという仮説を、ごく簡単にではあるがここで提示しておく。

兄弟の関係にしても如意宝珠との関わりについても、まだ仮説の域を出ていないが、『彦火々出見尊絵巻』が、後白河院の王権の正当性と、龍宮との繋がりを確認するために制作された可能性をもつものであり、子ども向けのナイーヴな絵画ではないということを主張し、後白河院政期において、彦火々出見尊神話がいかなる意味をもって享受されていたのかを再考する必要性があることを、ここで唱えておきたい。

四．『彦火々出見尊絵巻』と中世日本紀
――今後の研究のために

では、『彦火々出見尊絵巻』が、後白河院の王権の正当性を唱えるために制作された作品であったとすると、絵巻の題材に『日本書紀』の神話を選んだことと、かつ、その絵巻の物語の流れが、『日本書紀』のそれとはかなり変更されていることは、後白河院政期において、『日本書紀』がどのように享受されていたのかという問題に結びついてくる。院政期には、公の場での『日本書紀』講釈こそ断絶していたが、信西による注釈書『日本紀鈔』が生み出されるなど、中世日本紀へと展開していく動きは確実に認められ、この時代における『日本書紀』享受が、いかなる形で後白河院の絵巻制作と関わっていたのか、いわゆる中世日本紀と絵巻との関係についてもさらに検討せねばなるまい[15]。

管見では、後白河院と『日本書紀』との繋がりを具体的に示す資料は見つけられなかったが、先に紹介した小松氏の論文で、詞書の書風から、絵巻の制作年代が一一七〇年代に推定されていることに従えば、『日本紀鈔』を記した信西はその時既に亡く、信西が直接働きかけた形ではないにせよ、『日本書紀』を題材にした絵巻を制作できるだけの素養が、後白河院の周辺にあったということとなる。

また、絵巻の詞書があまりにも『日本書紀』とは異なって

いることから、『日本書紀』と『彦火々出見尊絵巻』の間に、何らかのテクストが介在していたと考えることも可能であり、この点からもやはり『彦火々出見尊絵巻』は、院政期における日本紀享受のあり方と併せて調べていく必要がある作品なのである。(16)

以上、『彦火々出見尊絵巻』が、後白河院が激動の時代を生き抜くために制作した絵巻の一つなのではないかと提議し、絵巻に見られる特徴が、後白河院のサロンが生み出した変更なのかどうかをさらに追及していく必要性を自覚したうえで、次の論に繋げたいと考えている。

今回の論は、『彦火々出見尊絵巻』に、絵巻を制作させた後白河院の願望が反映されていた可能性を考えるものであったが、作品に制作された環境が反映されているかどうかは論証しにくく、十分気をつけねばならない問題である。絵巻に制作されたサロンの背景が影響しているかどうかという論は、本当にそれらの問題が内包されているか否かを証明することが大変困難な問題である。(17)

本論文にも仮説で止まっている点はあるが、しかしながら、『彦火々出見尊絵巻』を制作された時代に戻して考え、これまで見落とされていた、王権との関わりが含まれていた可能性を提示し、問題提起をすることはできたのではないかと思う。今回は『日本書紀』と絵巻の詞書との間の、特に重要と思われる相違点について考えることに終始してしまったかもしれないが、ここで原テクストと絵巻という、狭義の「文学と絵画」の比較にとどまることなく、後白河院が制作させた数多くの絵巻について総合的に研究し、後白河院が蓮華王院宝蔵に成立させたコレクションがどのような意味をもって院政期に機能したのかを考えるうえで、今後発展させられる問題であるだろう。

註

(1)源豊宗「彦火々出見尊絵」『大和絵の研究』〔角川書店、一九七六年〕所収（初出は「彦火々出見尊絵詞の研究」『関西学院大学文学部記念論文集』〔関西学院大学、一九五九年〕）。

(2)「看聞御記」『続群書類従　補遺四』〔続群書類従完成会、一九二五年〕、嘉吉元年（一四四一）四月二十六日条。

(3)小松茂美氏の研究は、『彦火々出見尊絵巻の研究』〔東京美術、一九七四年〕としてまとめられ、その後「『彦火々出見尊絵巻』の制作と背景」『日本絵巻大成　第二十二巻　彦火々出見尊絵巻・浦島明神縁起』〔中央公論社、一九七九年〕、同「『彦火々出見尊絵巻』と『浦島明神縁起』――海幸彦・山幸彦と浦嶋子の物語」『続日本の絵巻　第十九巻　彦火々出見尊絵巻・浦島明神縁起』〔中央公論社、一九九二年〕と、中央公論社から出版

されたカラー図版集の解説としても発表されている。ただし小松茂美氏の論考は、なぜ後白河院旧蔵の絵巻が若狭国松永庄にあったのか、その伝来の経緯の解明に力を注ぎすぎている感がある。

(4) 蘆田伊人編『大日本地誌大系　第十三巻　若狭郡県志』[雄山閣、一九五八年]。

(5) 保立道久「『彦火々出見尊絵巻』と御厨的世界――海幸・山幸神話の絵巻をめぐって」『物語の中世――神話・説話・民話の歴史学』[東京大学出版会、一九九八年]（初出は「『彦火々出見尊絵巻』と御厨的世界」田名網宏編『古代国家の支配と構造』[東京堂出版、一九八六年]）。

(6) 小島憲之ほか校注・訳『新編日本古典文学全集・第二巻　日本書紀（一）』[小学館、一九九四年]、一五五～一八七頁。

(7) 源、註（1）前掲論文、二一五～二一六頁。

(8) 源、註（1）前掲論文、二二〇頁。

(9) ただし、『日本書紀』には、正文の他に「一書」が四種類挙げられており、そのうち一書第二には、出産の場面も姫が龍王宮に帰っていく場面もない。

(10) 高畑勲『十二世紀のアニメーション――国宝絵巻物に見る映画的・アニメ的なるもの』[徳間書店、一九九九年]は、『彦火々出見尊絵巻』の図版を紹介しつつ、姫が鰐になっていないことをこのように説明しているが、納得しかねる。また、源氏も前掲論文において、姫が海に帰らないことの理由を十分に説明してはいない。

(11) 栃木孝惟ほか校注『新日本古典文学大系・第四十三巻　保元物語・平治物語・承久記』[岩波書店、一九九二年]一三三頁。

(12)『日本絵巻大成』における翻刻による。

(13) 永積安明・島田勇雄校注『日本古典文学大系　保元物語・平治物語』[岩波書店、一九五九年]三四九頁。

(14) 田中貴子「宇治の宝蔵――中世における宝蔵の意味」『愛法と外法の中世』[砂子屋書房、一九九三年]（初出は『伝承文学研究』第三六号、一九八九年五月）。

(15)「海幸山幸」の神話は『古事記』にも語られているが、絵巻が依拠したのが『日本書紀』であろう、というところまでしか先行研究はいずれもふれておらず、中世日本紀との関わりについては、全く問題にされてこなかった。なお、院政期における日本紀享受のあり方については、吉原浩人「院政期の日本紀享受」『国文学　解釈と観賞』第六十四巻三号[至文堂、一九九九年三月]を参照した。また、『日本紀鈔』については、中村啓信『信西日本紀鈔とその研究』[高科書店、一九九〇年]に影印・翻刻があり、こちらを参考にした。

(16) 小松茂美氏は、註（3）に挙げた著書及び論文で、『彦火々出見尊絵巻』に先行する文字テクストとして、若狭彦神社に伝来した『若狭彦若狭姫大明神秘密縁起』の存在を指摘しているが、この縁起は、書写年代が室町時代のものであるため、まず院政期の作品と関連づけて考えてよいものかという問題と、また、

仮に縁起の成立が、後白河院政期まで遡ることができたとしても、前述したように、『彦火々出見尊絵巻』が若狭に伝来したのは、後白河院没後のことであるため、若狭における彦火々出見尊信仰と『彦火々出見尊絵巻』を結びつけて考察してよいのかという問題を孕んでいる。

(17) 既に三谷邦明・三田村雅子の両氏が、徳川・五島本『源氏物語絵巻』(国宝)において、『源氏物語』の読み替えがなされ、絵巻化という物語の再生産の過程において、白河院のスキャンダルが反映されていることを論じているが(三谷邦明・三田村雅子『源氏物語絵巻の謎を読み解く』[角川選書、一九九八年])、絵巻の制作背景とその反映の問題は、確証ある論が展開しにくいものではある。